

三沢市立三沢病院での小児科実習を終えて

弘前大学医学部医学科 5 年 中井 杏美

小児科実習では、疾患の診療だけでなく、子どもと家族を包括的に支える医療のあり方について多くの学びを得ることができました。特に印象に残ったのは、往診で経験したムコ多糖症の兄弟への在宅医療です。3 人とも人工呼吸器を装着しており、家の中はまるで集中治療室のような環境で、大きな衝撃を受けました。医師を中心に、看護師、訪問看護、在宅支援スタッフ、コーディネーターの方など多職種が一体となってケア体制を話し合い、1 人の子をディズニーに連れていく時の他の兄弟の対応などを検討していました。医療とは単に生命を維持することではなく、患者さんやご家族の「生きる希望」や「願い」を支えることでもあるのだと強く感じました。また、重症児であっても「できることを最大限に広げる」視点がいかに大切かを学びました。人工呼吸器管理下での知育やリハビリ、家族への心理的サポートなど、医学的知識だけでなく人間としての寄り添いが求められる小児医療の奥深さを実感しました。



外来診療では、一般的な疾患の診療から、アレルギー、心臓、腎臓外来などの専門外来まで幅広く見学しました。中でも印象に残ったのはアレルギー外来です。診察室の雰囲気はまるでお茶の間のように温かく、保護者の方もお子さんもリラックスして話している様子が印象的でした。病気の話だけでなく、子育てや家庭での困りごとなど、どんなことでも気軽に相談できる空気が流れており、医師と患者・家族の間に深い信頼関係が築かれていることを感じました。そのような雰囲気づくりは医師の言葉遣いや表情、姿勢から生まれているのだと感じ、自分も将来、患者さんに安心感を与えられるような医師になりたいと思いました。医療技術や知識だけでなく、コミュニケーション能力や人間性の重要性を改めて実感することができました。さらに、1 か月健診や 1 歳健診にも参加し、健やかに成長する子どもたちに触れました。診察の合間に見せてくれる笑顔や、保護者の方が安心した表情を浮かべる瞬間を見て、子どもは本当に社会の宝であると感じました。日々病気の診療を行う中でも、こうした「健康を守るための医療」が小児科の大切な役割であることを学びました。

小児科実習を通して、子どもを診るということは、同時に家族全体を診るということでもあるという視点を学ぶことができました。重い病気を抱えるお子さんにも、健やかに成長して

いくお子さんにも、それぞれに異なる背景や家族の思いがあります。医師は病気だけをみるのではなく、その子の「人生」と「家族」をまるごと支える存在であることを改めて実感しました。この経験を糧に、どの診療科に進んでも患者さんやご家族の生活背景を大切にできる医師を目指していきたいと思います。最後に、2週間お忙しい中ご指導くださった小児科の先生方をはじめ、スタッフの方々に本当に感謝申し上げます。ありがとうございました。

実習期間：2025.9.16～2025.9.26